

第6回ESD構成主義研究会 概要報告

奈良教育大学 次世代教員養成センター 中澤 静男

- ◇開催日時 平成29年8月16日(水)19時~21時
- ◇会場 奈良市立病院3階ダイルーム
- ◇参加者 河野(附属小学校)、新宮(平城小学校)、島(郡山西小学校)、中澤(奈良教育大)
- ◇内容

『状況に埋め込まれた学習』ジーン・レイブ、エティエンヌ・ウェンガー著、佐伯胖訳、産業図書、平成5年、第3章「産婆、仕立て屋、総舵手、肉屋、禁断中のアルコール依存症者」の講読

- ・徒弟制に見られる仕事と学習のいかなる複雑なシステムも、その歴史、技術、発展する仕事の活動、経歴、さらに新参者と古参者の関係、あるいは共同作業や実践者同士の間関係などを根源としており、またこれらすべてを通しての相互依存関係もある。
- ・これまでの徒弟制に対する教育的な見方は、時代錯誤の無用の長物、廃れた教育としてであった。
- ・教育を単なる知識やスキルの獲得だけでなく、人格の形成に関わるものであると捉えたとき、学習のアイデンティティが十全的参加に向けて関わり合い、発展するためには、学習者が正統的周辺参加者でなければならないことを強調することになった。



学習はアイデンティティの形成・変容と深くかかわっている。潜在的な資質も、本人か他者が気が付かないと埋もれたままだ。児童生徒の何気ない発言や行動をキャッチした他者が褒めることで、それが強化される。その繰り返しが、その人独自の資質能力を形作る。さらに周囲の者がそれを認めることで、自己の視線と他者からの視線が合致し、アイデンティティが強固になっていく。児童生徒にとって身近な存在である教員には大きな役割があると言える。

学習を成立させるためには、学習者が正統的周辺参加者でなければならない、ということは、正統的周辺参加者としての位置づけが与えられていること、実践へのアクセスが容易であり、阻害されていないことなどが条件となる。

- ・ユカタンの産婆の徒弟制
将来産婆になるマヤ族の少女はたいがいその母親か祖母が産婆であり、その徒弟制は日常生活の一形態となり、産婆術も日常生活の流れの中で伝承されている。
産婆は、教えているという特別な意識はない。自分のために手伝わせているという感覚である。しかし、教えていなくともそこに学習が成立している。
- ・ヴァイ族とゴラ族の仕立て屋
公式的な徒弟制では、追加される労働力の要請と個人ないし家族の多様な職業における知性的技能を獲得したいという欲望(これは家族内では満たすことはできないもの)を扱うメカニズムとして発展した。
今日の西アフリカでは、比較的穏やかな、比較的平等主義的な、非搾取的な特徴が徒弟制に見られる。
ヴァイ族の親方と徒弟は、徒弟制に入る前に公式の協定で合意する。またそこでの学習のカリキュラムには明確な構造がある。また、徒弟制の終了時には、親方から公式の祝福を受ける。

(全体の観察 → 完成まじかの製品への関わり → より出発点に近い仕事)

※産婆と仕立て屋の例は、公式的かあるいは非公式的な徒弟制を通して、実践共同体における周辺から十全的参加へのプロセスという点で、強い類似性を明らかにしてくれる。

・海軍の総舵手の徒弟制

初心者は訓練中は、より経験を積んだワッチ担当者が一対一で指導する。

初心者がワッチに関する6つのポジションの業務がこなせるようになると、6人の総舵手が協同して船位決定する作業に従事する。

6人の協同作業を遂行するにあたって求められる条件

チームの他のメンバーにもその仕事を開いている（誰からもアクセス可能）

道具そのものが共同作業者に開かれており、誰もがアクセスし利用できる構造になっている

（この構造になっていないのが、次の肉屋の例である）。

・肉加工職人の徒弟制

多くの今日の職業教育や同業者組合が基盤となっている「徒弟制」プログラムは、暗黙の内に徒弟制モデルを排除して学校教育の教育プログラムでの教え込み様式を真似る努力をしており、それは必然的に、効果的な徒弟制がうまく働くことをますます困難にしている。

職人も徒弟も金儲け仕事に専念しているために、徒弟が多くの仕事を学習することはほとんどありえない。

徒弟は他の人々を観察したり、自ら観察されたりして多くのことを学ぶのであるが、ある肉売り場は、包装機械で働く徒弟には職人が肉をカットしたり挽いたりするのが見えないような配置になっていた。「あそこじゃとても場違いな感じになる。永いこと行ったことがない」

徒弟のみならず職人も、ひとたび自分の職にはまってしまうならば、作業の全領域を学ぶことはめったにない。

・断酒中のアルコール依存症者の徒弟制

AAの役割は、本人に自分がアルコール依存症であることを自覚させ、アルコール依存症者としてのアイデンティティを再構築させることである。

依存症者ではないと思っている限り、「飲酒をいつでもやめられる」ととらえてしまうため、やめることはできない。自分が依存症者であると自覚することで、断酒を継続できる。

※人々が変わるのは、行動が変わるだけのことではない。それは彼らのアイデンティティの変容である。世界でのものごとの見方、振舞い方が変容するということである。これを促進させる一つの重要な道具立ては、パーソナル・ストーリーである。

パーソナル・ストーリー、アルコール依存症者にとって、モデルを提供している。また何度も耳にすることで、多くのAAの会員が自らもパーソナル・ストーリーを語るができるようになる。内容としてのモデルであり、方法としてのモデルでもある。

【徒弟制と状況的学習—新たな検討課題】

- ・徒弟制は参加と見識が深まっていくプロセス
- ・実践共同体における幅広い、また広範囲に正統的な周縁的参加が、理解とアイデンティティの増大にとって中心的である。
- ・教えることや公式の意図的な学習状況といった点へのとらわれをやめて「成員であるためのすべての手段」や「成員性の根拠にアクセスすることが中心になっているケース」に関心を向け直す。

→ 成員の手段…公式であろうとなかろうと

→ 実践にアクセスできる状況にあるということ

- ・新参者は、熟練者からスキルや知識を学ぶだけではない。熟練者の仕事観や生き方、アイデンティティそのものを身近に感じることで、「あこがれ」を抱かせる。それが学ぶ動機になっていく。

※ベッカーとの共通点と相違点

(1) 共通点

新参者が進行中の活動に加わるということは、新参者に学習に関わる場の中にいることの価値を与え、仕事ー学習の場面での学習への強烈な目標の存在、テストというものの不在、徒弟制の学校以上の効率の良さを保証する。

(2) 相違点

ベッカーは、徒弟制での学習には、教えることが中心的であると考えていた⇨産婆

さらに、徒弟たちは一人ひとり自分独自の学習「カリキュラム」を編成し、教え、あるいは指導を自分で他から引き寄せてこななければならないのだと考えていた。

※もしも徒弟制が仕事と学習が切れ目なく関連づいているような教育形態だとしても、それにもかかわらずそれは仕事と新参者の理解とが進行中の作業過程に対して複雑な、変化する関係を持ち続ける形態である。

→新参者は仕事のスキルだけを学んでいるのではない。職場内の人間関係になじみ、自分の居場所を獲得するようになると同時期に、熟練者からも仲間として認められるようになる。それは職場環境の改善や生産性の向上に結び付いていく。

次回は、9月2日（土）の源流館での授業づくりセミナーの後に開催します。

第4章の講読をします。けっこう難しいので、しっかり読み込んで来てください。

